

編集後記

今年もスポーツに関するさまざまな出来事が世界各地で起こった。

ひとつの「事件」とさえ表現できるものが、ラグビー・ワールドカップでの対南アフリカ戦において日本代表チームが歴史的勝利を収めたことである。この勝利の反響は日本にとどまらず、さまざまな国、地域、そこに暮らすラグビーを愛する人々にまで及んだ。

このようにスポーツのすばらしさを示してくれた出来事もある一方で、FIFAの大会誘致をめぐる賄賂などの組織的不正、ロシアの国家レベルでの組織的ドーピング疑惑、あるいは、プロ野球巨人軍の選手による反社会的勢力絡みの賭博などが世間を賑わし、スポーツに対するダーティなイメージを増幅させた問題が国内外で相次いだ（こうした「問題」の方に目がいきがちなのは「職業病」ではあると自覚しているが、歴史の流れを含めて考えるとき、これらの問題の根の深さを感じざるを得ない）。

こうした状況からも、現代社会にあって、社会におけるスポーツの有り様（何より「2020年」というものがある）をとらえることが大きな課題となっているということができようが、本研究年報においてスタッフがそれぞれの持ち味を持って、多様な視点、アプローチから「スポーツと社会」というテーマに切り込んでいる。

忌憚のないご意見をいただければ幸いです。

スタッフの論考等のほか、ゲスト研究会にもとづく2本の論考が掲載されている。「はじめに」にも記されているので詳細はここでは割愛するが、ご多忙の中、研究会の講演とともに原稿執筆にもご協力をいただいたWolfram Manzenreiter先生、Harald Dolles先生、および、研究会の設定や諸連絡等で尽力いただいた中澤、中村両氏にはあらためて感謝申し上げたい。

今年度からの新たな試みとして、これまで論考、研究ノートなどの区分を明記していたが、それらを取り払うこととした。

また、今年度は大学院生の論考の掲載はかなわなかったが、スポーツ社会学を専攻する院生たちはさまざまな形で研究活動を進め、研究能力の向上を図っている。来年度以降、投稿、掲載に至ることを期待したい。

私たちのスポーツ科学研究室のスタッフの交代は一段落した。これまでのゆるやかな共同研究体制という点をベースにしつつ、共同研究のあり方を再検討する時期を迎えている。その意味でいうならば、現在は「過渡期」ともとらえうるが、次なる展開を期して、継続的に議論を活発化させていきたい。

これまでと同様、関根助手による定例研究会の実施や編集実務をはじめとする有形無形のサポートによって、ここに今年度の研究年報の完成を見た。記して謝意を表したい。 (尾崎 正峰)

一橋大学 スポーツ 研究

Vol.34

「スポーツと社会」研究の諸相

2015年12月1日 発行

編集・発行 一橋大学スポーツ科学研究室

〒186-8601 東京都国立市中2-1

TEL 042-580-8270

<http://www.soc.hit-u.ac.jp/~sport/>
